

# ワクワク留学体験記

## INRIA / IRISA

### ～フランス留学体験記～

永谷直久（電気通信大学）



研究チームでの飲み会の様子

#### 1. はじめに

私は博士後期課程2年次の2008年11月から2009年3月までの約4ヶ月間、フランス共和国レンヌ市に滞在し同市に所在する国立研究所INRIA/IRISAにて研究を行ってきた。

INRIAとはInstitut National de Recherche en Informatique et Automatiqueの略称で日本語訳すると国立情報学自動制御研究所となり、ネットワークシステムやロボティクス、画像処理、VRなどその研究内容は多岐にわたる。INRIAはフランス各地に点在し、中でもレンヌ市のINRIAはIRISAと呼ばれる。

留学期間として4ヶ月間は決して長くはない期間ではあるが、留学までの準備期間などを含めるとおよそ7ヶ月間に及ぶものであったので、今回このような場をかりて留学までに必要な手続きや、実際に現地で体験した文化の違いなどを中心に話を進めていきたいと思う。

特に、研究を行ってきたIRISAは大学ではなく国立の研究所であるのでいささか特殊ではあるものの、今後同じように大学以外への留学をする方々への資料の一つになってくれるようにと考え、稚拙な文章ながら私なりの留学体験記とさせていただくことを先に断らせていただきたい。

#### 2. 留学までと渡航してからの手続き

実際に私に留学の話が来たのは博士後期課程の1年次の2007年頃だったと記憶している。留学先であるIRISAのAnatole Lecuyer先生とは以前から研究室を通して交流があり、私自身博士後期課程の間に一度は海外の研究機関で研究がしたいという欲求もあったため二つ返事で留学を決めた。

期間に関しては、本当は半年程度滞在したかったのだ

が自身の研究プロジェクトがSIGGRAPHのデモに採択されるなどしたためにSIGGRAPH終了後からということになった。

渡航期間がある程度決まると、海外に滞在する際の手続きとして最も手間のかかるビザを取得する段階になる。フランスもアメリカなどと同様にその目的によって多様な種類があったが、私は研究目的でフランスの公認機関(大学、国立研究所)などに3ヶ月間以上の滞在予定であったので『長期研究者ビザ』の手続きをすることになった。このビザを取得するためには主に長期ビザ申請書とプロトコール・ダキュイという書類が必要なのではあるが、その中でも特にプロトコール・ダキュイの取得に非常に時間がかかった。というのも、この書類は滞在先の研究所と所在地の県庁の印が必要であり、その手続き自体はINRIAのエージェントの方がやってくれたのではあるが、こちらの履歴書は7月の終わりに提出したにもかかわらず8月から始まる長いバカンスによりその手続きが1ヶ月間ほどストップしていたのだ。結局、このプロトコール・ダキュイが手元に届いたのが10月終盤で、その後ビザを在日フランス大使館に申請して1週間ほど、出発直前によくやるとビザが取れるという慌ただしいものであった。少し本筋から逸れるが、実際に届いたのはプロトコール・ダキュイではなくコンベンショナル・ダキュイという書類でフランス大使館のHPでは全く変更されていないが、2008年くらいから変わったようである。

渡航前がこのように慌ただしかったので、もう面倒はないだろうと高をくくっていたが、実はまだ渡航後にやらなければならない手続きに関してはこの段階では気づいていなかった。その手続きとは滞在許可証の申請手続きである。そもそも、フランス大使館のHPは必要な手

続きが結構曖昧に書かれていてあまり信用にならない。滞在許可証の申請も学生ビザで6か月以上滞在する人や就労ビザなど一部の人のみ申請するように書いてあるように見えるが、実は私のように4ヶ月間の滞在でも渡航後必要になる。この手続きには自分の戸籍をフランス語に法定翻訳されたものなどが必要で、これは親にフランスの滞在先に送ってもらいその後現地の公認翻訳会社に依頼して作成した。

これらの作業に比べれば銀行口座の開設や住居の手続きなどはエージェントがしっかりとやってくれていたため簡単な手続きで済んだのはありがたかった。いずれにしても、これら留学前そして留学中に必要な手続きというのは留学で得られる多くの素晴らしい経験や出会いに比べると些細なことではあった。

### 3. 全てが新しい留学体験

学会発表や個人的な旅行で海外に滞在中はあったとしても、1か月を超える長期間滞在中をしたのは生れて初めてだった。そのような要因もあるかもしれないが、より自分の生活の深いところまで多文化が浸透する機会を得ることは本当に新鮮だった。

ここでは、そのような体験の中から特に研究スタイルと生活スタイルという二つの観点で簡単に紹介したいと思う。

研究スタイルに関して、これは受け入れ先の IRISA Bunraku チームのみのスタイルかもしれないがチーム内での定期的なミーティングというものが無い。むしろ、各個人や各プロジェクトでそれぞれ不定期に時間を見つけてはミーティングを行うという形式であった。このスタイルのいいところは何か新しい発見や問題があったときに短時間であってもその情報を共有する場所を作ることができるということである。

さらに面白いのは、フランス人のカフェ好きが研究スタイルにも表れていて、ほとんどの研究者は一日に3回カフェに行く。朝研究所にきてまず1杯、昼御飯のあとに1杯、カフェが閉まる前の16時から17時の間に1杯。ここで重要なのは、カフェは一人ではなく複数人で行くということ。簡単にいうと、このカフェがディスカッションの場として機能しているのだ。もちろん、ありふれた日常の会話なども含まれるが、そこで様々なアイデアなどを言い合う。

最初はカフェに行きすぎだと思っていたが、慣れると時間の区切りがうまく付き作業も緩慢ではなくメリハリがいった。

生活スタイルについて、フランスもキリスト教圏であるが故の日曜日は完全休日という慣習にまずは驚かされる。日本のようにコンビニがあるわけでもなく、食料は前日の土曜日にまとめて買いこむ。

Anatole 先生曰く、土曜は市場に行って食料を買い込み、日曜は家族とともに過ごすというのがこちらのスタイルだそうだ。実際、私は併設する大学の学生寮に住んでいたのだが、ほとんどの学生は金曜日の夜に実家に帰り日曜の夜に寮に戻ってくる。そして、週末は実家に帰るので学生達は木曜日の夜に友達みんなで飲み騒ぐ。飲みは週末という固定概念が崩れた瞬間である。飲みのスタイルは置いておいて、これは家族との時間を大切にするという思いが非常に強いことの表れであり、見習いたいと感じたスタイルの一つでもある。



学生寮の友達と手巻き寿司パーティーの様子

### 4. おわりに

素晴らしい留学体験の機会を下さった IRISA の Anatole 先生、そして指導教員の稲見先生に感謝したい。そして、この留学体験記が今後留学してみようという志を持った方々の心に一語でも残ったのであれば、大変嬉しい限りです。

#### 著者略歴

永谷直久

電気通信大学大学院知能機械工学専攻 博士後期課程3年。日本学術振興会 特別研究員 (DC1)。前庭感覚電気刺激の視覚への影響に関する研究に従事。